

霞を俵だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第94号
平成22年3月26日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>



春の訪れ（金剛峯寺前）

利用案内

開館時間	11月1日～4月30日 8時30分～17時00分	休館日	年末年始のみ
5月1日～10月31日 8時30分～17時30分	拝観料	大人	6000円
	高・大学生	3500円	
	小・中学生	2500円	
	専用駐車場あり		

冬期平常展 開催中

詳細は2頁をご覧ください

第94号 目次

展示のご案内など	2
収蔵品の紹介68	3
高野山の結果と女人禁制などの タブー	4～5
第四回もみじ祭フォトコンテスト 入選作品発表	6～10
ワークショップ開催報告	10
霊宝館の庭園	11
図録バックナンバー紹介	12
※連載「高野山の名鐘」「よもやま話」、 コラム「神は細部に宿る」は、紙面 の都合によりお休みします。	
過去四年間の「霊宝館だより」バックナ ンバー(PDF版)を、ホームページか らダウンロードできるようにしました	

冬期平常展を開催中

ただいま開催中の平常展では、高野山にゆかりのある武将・僧侶にまつわる品々を紹介しています。



弘法大師十大弟子像（絵画）や、人間国宝・故大隅俊平刀匠が金剛峯寺に奉納された太刀・短刀も展示中です。

- 主な展示品**
- 国宝 紺紙金銀字一切経 金剛峯寺
 - 重文 紺紙金字一切経 金剛峯寺
 - 重文 宋版一切経 金剛峯寺
 - 県指定 真田幸村（信繁）自筆書状 蓮華定院
 - 真田幸村像 蓮華定院
 - 頭形兜（真田幸村所用） 蓮華定院
 - 頭形兜（武田信玄所用） 成慶院
 - 三鈷杵（伝行勝上人所持） 蓮華定院
 - 宥快自筆血脈 宝寿院
 - 応其上人書状集 金剛峯寺
 - 両頭愛染明王坐像 金剛峯寺
 - 鶏凶屏風 桜地院
 - 富士図（狩野探信筆） 宝寿院
 - 聖天秘密曼荼羅図 金剛峯寺
 - 愛染明王十七尊曼荼羅図 宝寿院
 - 宝篋印塔嵌装舍利厨子 金剛峯寺
 - 梨地武田菱紋金銀蒔絵文箱 成慶院

今後の展示予定

特集陳列「豊臣秀吉と高野山」

四月二十四日（土）～七月十一日（日）
 天正十三年（一五八五）、豊臣秀吉は高野山を焼討ちしようとしたが、木食（むくじ）応其上人の働きかけにより中止しました。上人に帰依した秀吉は、高野山の庇護者となり、二十五棟もの堂塔を上人に命じて再興させました。また、秀吉の寵を失った養子・秀次は、高野山に追放され、自刃を命ぜられました。その折に詠んだとされる辞世の句もあわせて公開します。

主な展示品

- 太閤秀吉像 持明院
- 応其上人像 蓮華定院
- 北政所御影 宝寿院
- 天瑞寺大政所御真影 宝寿院
- 重文 高麗版一切経 金剛峯寺
- 重文 経蔵額 金剛峯寺
- 騎獅子文殊菩薩像（奥之院経蔵本尊） 金剛峯寺



太閤秀吉像 持明院

- 県指定 文祿三年連歌懐紙 安養院
- 秀吉刀狩朱印状 金剛峯寺
- 関白秀次辞世短冊 金剛峯寺

夏期特別展

「ちいさなほとけさま」

七月十七日（土）～九月二十六日（日）
 ほとけさまのお姿は、大きいこともあれば小さいこともあります。夏期特別展「ちいさなほとけさま」では、〈小・幼・細・若〉という四つのキーワードを設定し、高野山の「ちいさなほとけさま」を展示します。皆さんは「ちいさな」という言葉にどのようなイメージを持たれるでしょうか？

主な展示品

- 国宝 響替指帰（上巻）
- 国宝 八大童子立像の内、矜羯羅童子立像
- 重文 毘沙門天立像（胎内仏）
- 重文 毘沙門天立像（胎内仏）
- 重文 快慶作・孔雀明王坐像
- 重文 西界曼荼羅図（血曼荼羅）
- 金剛夜叉明王立像（初出陳）
- 快慶作広目天像胎内納入文書（初出陳）
- 以上 すべて金剛峯寺
- 国宝 伝船中湧現観音像 竜光院

秋期企画展

「海を渡る名宝—アジアの中の高野山」

十月二日（土）～十二月十二日（日）
 高野山に伝わる文化財の中には、はるばる海を渡って来た物も数多くあり

ます。秋期企画展では、中国や朝鮮半島などからもたらされた絵画・書跡・工芸品の名宝を一堂に集め、高野山と近隣アジア諸国との文化的なつながりを考えます。

主な展示品

- 国宝 文館詞林残巻 宝寿院
- 重文 梵本大般涅槃経断簡 宝寿院
- 重文 阿弥陀如来像 成福院
- 重文 古銭 金剛峯寺
- 重文 蓮弁文青磁花瓶（龍泉窯） 金剛峯寺
- 四季山水図（仇英筆） 宝寿院
- 行書韋応物七言絶句軸（張璪画筆） 宝寿院
- 楊柳観音菩薩像 宝寿院

宝物貸出情報

特別展「長谷川等伯」

- 京都国立博物館 二〇一〇年四月十日（土）～五月九日（日） 成慶院
- 重文 武田信玄像 成慶院

特別展「大遣唐使展」

- 奈良国立博物館 二〇一〇年四月三日（土）～六月二十日（日）
- 正智院 文館詞林
- 金剛峯寺 諸尊仏龕

ほかに重文四件八点
 詳細はホームページをご覧ください。

収蔵品の紹介 68

(釈文)



尚々つほこし
申候、しやうちうの
き、たのミ申候、御座候者、
此外ニも取申度候、
猶此者可申入候

其後不申承候、

仍此つほこしやうちう

御つめ候て可

給候、今程無

御座候者、次而

御座候折節頼

入申候、御むつかしく

候共、口能御つめ、

其上御はり候て

可給候、御左右次

第、重而取ニ

可進之候、又此

式ニ候へとも、ゆかた

ひら一進之候、

其元御隙ニ

与風御下候へかし候と

存候、恐々謹言

真好白

六月廿三日 信繁(花押)

左京殿

県指定

真田幸村自筆書状のうち

焼酎の文

一卷 蓮華定院 桃山時代

年不明六月二十三日付

縦17・5cm 横91・0cm

大河ドラマやTVゲームなどの影響で昨今、特に若い世代に戦国武将が人気なのだそうです。霊宝館には有名武将らの肖像画が数多く収蔵されており、テレビや雑誌などで写真をご覧になることもあるかと思えます。保存の面や密教美術を中心に展示を行うという霊宝館の性格上、それらはなかなか頻繁に展示することはできませんが、現在平常展において戦国武将や大名家ゆかりの品の小特集を行うっており(四月上旬までの予定)、本状は四月四日まで公開されています。

真田幸村(一五六七〜一六一五年)は在世中の確かな資料の中での名は「信繁」といいますが、一般的には幸村の名で知られていま

す。信州上田(長野県)を本拠とした戦国大名であった幸村の父・昌幸(一五四七〜一六一二年)と共に関ヶ原の合戦(一六〇〇年)においては西軍に属し、敗戦後父子は高野山へ配流になりました。当初は真田家菩提寺の蓮華定院に、のちに同院が管理する山麓九度山に蟄居(謹慎)していました。九度山町にある真田庵はその住居跡とされており、同町では毎年五月四、五日には「真田まつり」が行われています。昌幸は九度山で没し、幸村は大坂冬の陣・夏の陣(二六一四、一六一五年)で徳川勢を相手に大健闘するも壮絶な最期を遂げます。徳川本陣に突入し、あと一歩のところまで家康を追いつめた幸村は英雄視され、のちに

講談本や池波正太郎著『真田太平記』などでは真田十勇士とともにその活躍ぶりが描かれています。江戸時代より現在に至るまで非常に人気の高い武将です。

本状は九度山で生活していた頃の幸村の書状で、「真好白」は幸村の号、宛先の「左京殿」は兄・信之の家臣ともされますが詳細は明らかではありません。

その内容は焼酎を無心するもので、壺の口に詰め物をし、紐などを張るよう指示しています。お札に湯帷子(入浴時に用いる着物)を一領差し上げます、他にもあれば頂きたい。詳しいことは使いの者が申します、といった事が記されています。焼酎の密封方法についての事細かな注文から、実は暗号文ではないか、との見方もあります。また、古い書状のならわしで、追伸文は本文の行間に書いていたため前半部分は文章が入り交じっています。

九度山での生活は恵まれたものではなく、のちに徳川方に「日本の兵」と言わしめた幸村不遇の時代のようなすうかがえる資料として、また彼の現存数の少ない書状の一つとして貴重です。

(F)

高野山の文化

高野山の結界と女人禁制などのタブー

前奥之院維那 日野西 眞定

(一) 五来重先生の仏教民俗学

日本民俗学及び修験道に大きな足跡を残された五来重先生は、昭和十七年から同三十年までの十五年間、高野山大学で日本史を教授して下さった。その間に、「仏教民俗学」という学説を立てられた。なお、昭和三十七年に大谷大学で博士号を取られたが、主論は、「日本仏教民俗学論考」であった。この学説が先生の仏教研究の拠り所であったことは明らかである。

この「仏教民俗学」というのは、日本の仏教は、インドで起った「仏教(又は密教)」そのままではなく、それに日本人の民俗信仰を加味した日本独自の仏教であるという学説である。

勿論これには、それによった民俗学を使った研究方法もあり、私はこれを、

先生に指導された通りに使って研究を進めている。これは、高野山の信仰史の謎を解く鍵であるが、今これを説明するに当たって、「結界」とタブーという実例を示して皆さんに理解をして頂きたいと思う。

その前に、五来先生と小生の出会いについてから書かせていただきたい。

このこともすでに『山岳修験』(第41号、平成二十年三月刊)に発表しているが、もっとも私のご縁が深い、高野山の機関誌に書いて置きたいと思う。

(一) 五来重先生との出会い

私は中国は大連の生まれで、大連中学五年になった時、僧侶になりたいと

思い、受験の参考書を調べてみると、高野山大学があった。仏教大学としては、もっとも宗教大学らしいふんいきにあると感じて受験して入学の許可を得た。私はこの勘(かん)は当たったと思っ

ている。大学は深い伝統に包まれた霊山の中にあり、研究資料は膨大に存在し、日本一といってもよいほどある。私はこの中で、年中行事を選んだが、資料自体が整理されていないこともあって、集めるだけでも二十余年もかかり、今やっとこれを整理しまとめにかかっている。

先学書としては、水原堯榮師の『金剛峯寺年中行事』(昭和九年刊)が存在するが、師は本山法会課の全面的な協力を得て、法会実習の立場からまとめられ、今でも高野山の僧のテキストとして生きている。

ところが、私は平成七年三月、高野山大学を定年となり、研究に専心した

いと思っていたところ、同十年十月から本山の要請によって、奥之院維那に任命され、三期九年間を勤めさせていただき、やっと同十九年から自由の身となり、研究のまともに入った。ところが今度は、高野町史の仲間には是非入ってほしいとの要請が教育長側からあり、高野町のためと思い断り切れず、同二十年から執筆仲間に入れてもらった。入ってみると、一番中心となる金剛峯寺年中行事、納骨信仰等を書かねばならないことになった。

私個人としては、『高野山民俗誌「奥の院編」』の増補再版・『高野山の女人禁制』・『高野山の年中行事』の三冊は是非ともまとめて、この世に残して置きたいと頑張っている。というよりも、これを持って 大師のいますお浄土に往きたいと念願をしている。

これを語る前に、どうしても五来重先生との出会いを記しておかなければ

ならない。私でないと書けないことがある。
 私が大連中学を卒業し、高野山大学に入学を許されたのは、昭和十八年四月であつた。第二次世界大戦も厳しくなり、大連港からの客船には乗れず、陸路を列車で満鉄が作った特急あじあ号は今の新幹線に当たるが、それで奉天まで行き、韓国に行き、釜山から客船で下関に着いた。後は内地（国内を

満州の人達はこう呼んでいた）の国鉄であるが、満州の列車は「広軌」（鉄道のレールの幅が国際標準一・四三五m以上）なのに対し、内地のは「狭軌」であり、機関車の大きさも大分違う。プラットホームに入つて来ても、こわくて後に退く必要もなかった。日本全体が、美しく人工化された小さな世界のように思えた。
 大学に入ったが、病気のために休学



花園村に來られた五來重先生（左）と歓談する遍照寺住職井上龍雄師（右）
 昭和51年（1976）10月 日野西撮影

した。サナトリウムに入り養生し、再び高野山に帰つて来て、復学を許された。当時の旧制大学は、予科二年と学部三年に分れていた。私は予科一年生であつた。二年生以上は、学徒動員といい、工場の生産活動に派遣されていた。高野山大学生は、和歌山の住友工場に行つていた。予科一年生は、学校警備のためという名目で残されて、授業が続けられていた。五來先生は、その予科生の担任教授であつた。遠く外地から来ていた学生は、私一人であつたかと思う。そこで、先生は氣を遣つて下さつたかも知れない。

先生は、その時学長であつた金山穆韶師と相談して、私は学生寮から天徳院に移り、院内の仏を祀り、掃除をすることにうなづいた。天徳院には、他に老人の男衆がいて、私とともに三人になつた。

翌二十年八月十五日、昭和天皇の重大な放送があるというので、天徳院の金山師の部屋に、五來先生と小生の三人が寄り、ラジオを聞いた。それが所謂「終戦」の放送であつた。大混乱に落ちた私達は、先生とともに奥之院のお大師さまにお参りする他は、心を鎮める方法がなかつたことを思い出す。このことは、私の生涯の最も感銘の深い思い出として、心の底に深く生きている。

五來重先生 略歴

一九〇八年 茨城県日立市に生まれる。

一九三二年 東京大学文学部印度哲学科を卒業、高野山大学文学部助手となる。金山穆韶師の教化を受け、密教学の学者になろうとした。
 一九三四年 東京大学大学院文学研究科に入学。

一九三六年 京都大学文学部史学科に入学。西田直二郎先生の授業に関連して柳田國男先生の講義があり、民俗学を知る。

一九四〇年 高野山大学文学部助教授。

一九四二年 高野山大学文学部教授。在職中「仏教民俗学」の学説を発表した。

一九五五年 大谷大学文学部教授となり、修驗道の研究を近代化した。
 一九九三年 逝去

著書に『五來重著作集（全十二巻別巻一）』（法蔵館）『宗教民俗集成（全八冊）』『空海の足跡』『山の宗教』『仏教と民俗』『高野聖』（以上角川書店）『熊野詣』（講談社）『踊り念仏』（平凡社）『円空と木喰』（淡交社）ほか多数。



グランプリ賞 木下 滋

「同行二人」

撮影日当日は前日の雨で霧が発生し、とても幻想的な風景に出会うことができました。

また、四国から高野山に参拝登山をされている方との出会いもあり、紅葉にはまだ少し間がある町石道を、古人に思いを馳せながらのんびりと歩きました。

撮影場所 町石道

平成21年10月1日撮影

第四回もみじ祭

フォトコンテスト入選作品発表

(受賞者敬称略)

今回のフォトコンテストは、「高野山の道」をテーマに募集しました。写真にはコメントを添えてもらい、より親しんでいただけのようにいたしました。応募いただいた作品はどれも、高野山や写真に対する思いが溢れており、コメントにより作品に深みが増し、感動も大きいものとなったと思われまふ。ご応募いただきました方々には御礼申し上げます。全応募作品は四月四日まで霊宝館にて展示しております。



金賞 田伏 猛

若い頃からカメラ好きで常に手元に。仕事で週に2・3回高野山を往復します。ですから撮影は高野山周辺が多い。応募の作品は遍路姿に心を打たれて。信仰心を意識したことはないが、山内はまだ薄暗く人影も無い時に、大きな荷を背負い黙々と歩く姿に自然と手を合わせた。不思議な体験でした。お陰様で良い写真を撮らせてもらったと思っています。

撮影場所 奥之院参道

金賞 木戸友紀

六時の鐘を撮影していると、高野山らしい道路標識を発見。六時の鐘の屋根とお揃いでかわいくて、撮影しました。

撮影場所 六時の鐘付近



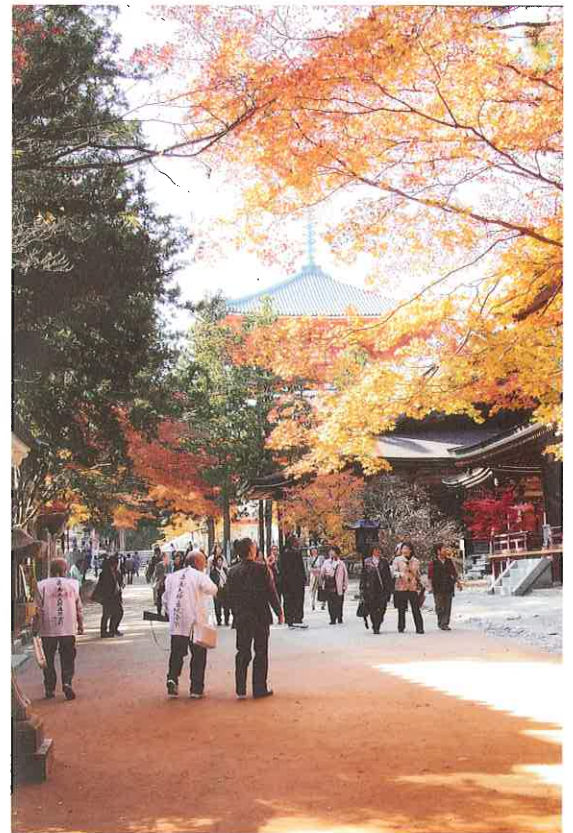
銀賞 保井一彦

11月27日午前7時頃、撮影ポイントを求めて蛇腹路から伽藍へ、そして大門、一の橋から奥之院へと感動を求めて歩きました。

写真を撮り終えて、お土産のゴマ豆腐を買って帰ろうとした時、ふっと女人堂へ最近行ってないな、私が子供の頃に祖母に連れられてケーブルカーとバスで来て、ここから山内に入ったという50数年前の懐かしい記憶が甦ってきました。今は殆どの人は車で大門から入りますが、当時はここに乗合馬車や人力車もあったような、昔はここから山内へ、もっと昔は女人禁制でここからは先は女の人は入山できなかったという話も祖母から聞かされたような懐かしい場所でした。

撮影場所 女人堂前

平成21年11月27日撮影



銀賞 楠本武男

10月31日好天に恵まれ、紅葉が綺麗で沢山撮りました。参拝者も多くどんな道が良いかなと考えて悩みましたが、根本大塔付近が人通りが多く、また紅葉が映えて人物までモミジ色に染まって天国のような感慨になり、結果この画像に決めました。

撮影場所 伽藍 じゃばらみち 蛇腹路

平成21年10月31日撮影



銅賞 戸谷晴彦

「高野山」内の「観光用」写真は多くありますが、「生活用」の「道」を撮影いたしました。

撮影場所 浪切不動尊付近の通路
平成21年11月4日撮影



銅賞 山中健次

コメントなし

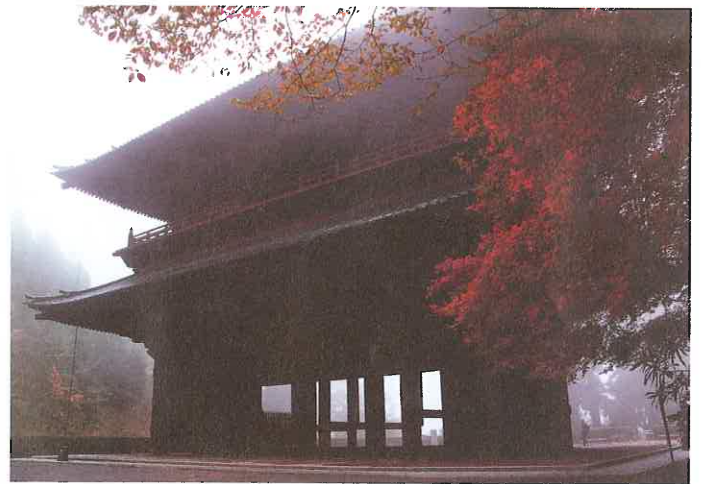
撮影場所 伽藍 蛇腹路



銅賞 岸本 亨

今回コンテストに参加するに当たり何箇所かの撮影ポイントはありましたが、蛇腹路がライトアップされるとの報道があり、一度見てみたいとの衝動に駆られ蛇腹路に到着したところ、若い娘さんが紅葉と戯れている姿が愛らしく、すかさずシャッターを切った次第です。昔もこのように若者が紅葉を楽しんでいたのだと、いにしえの高野の道が思いだされます。

撮影場所 伽藍 蛇腹路



銅賞 田中節行

11月1日夕方のTVニュースで、「高野山壇上伽藍」の紅葉の映像を見ました。明日は午前曇り、午後には晴れ、明後日からは天候は下りに向かう予報でしたので、明日の高野行きを決めました。

当日、車で河内長野市より高野街道 (R371号) を、橋本、九度山からR370号を、徐々に標高900mの山上の盆地に向かう。上古沢辺りから段々と暗くなり雨と風、突風が吹き荒れだし、車のフロントに小枝が叩きつけられ、枯れ葉が舞う中を、花坂を通過する頃から霧が前方を拒み、ライト点灯しました。やがて大門に近づく頃には、2~30m先が濃霧で霞み、高野山の総門 (正門) が白濁のベールに包まれて神々しく浮かびあがる姿に威厳があり、堂堂と佇む大門に尊厳を感じました。

その高野山の出発点であり「紀伊山地の霊場と参詣道」の入口でもある、紅葉彩られた参拝者を点に、霧に霞む威風堂堂と佇む「総門」にレンズを向けました。

撮影場所 大門
平成21年11月2日撮影



霊宝館長賞 牧野京子

高野山在住の老人です。10月29日、明神さんお詣りの帰り道、大塔の蛇腹路にさしかかった時、最高に美しい紅葉を見て思わずシャッター切りました。ありふれた景色ですが、私にとって、好んだ場所です。全くの素人の写真です。

撮影場所 伽藍 蛇腹路
平成21年10月29日撮影



霊宝館長賞 神山博文

11月4日正午頃蓮華谷の風景です。空が青くS字カーブの道と紅葉、奥に見える摩尼宝塔、全ての色が写しだされ、すみきった空気さえ感じさせる一瞬でした。高野山は15回来ていますが、こんなに晴れたのは珍しく、なおさら感動しました。

撮影場所 蓮華谷（成福院付近）
平成21年11月4日撮影



入賞 浅野善三

「散策の紅葉」

宿坊に泊まり、朝夫婦で女人堂まで散策していたら、塔と紅葉したもみじ、これから紅葉が始まるだろうもみじ、その間に落葉した柳風の木が塔を取り巻き、朝の日の光とのコントラストがなんとも言えない。思わずカメラを手にした。高野山の朝散策。

撮影場所 金輪公園



入賞 浅田裕巳

私は先日高野山に写真撮影に行きました。紅葉の真盛で天気も良く、この上ない撮影日でした。高野町には電線がなく写真が写しやすく感じました。町はきれいに清掃されていて自分の心が洗われた思いになりました。今回の募集は参拝道でしたので、奥之院が写る場所では撮影禁止だから、紅葉の美しく人通りの多い場所に絞って撮影をしました。よろしくお願いたします。

撮影場所 伽藍 蛇腹路



入賞 日下義眞

「朝の蛇腹路」

蛇腹路は、季節や時間、陽差し、雨、霧、雪などの天候によってその様子を変えていきます。

朝の蛇腹路は、参拝の方も少なく、一部の学生の通学路です。私もその一人で、中学校・高校の六年間、蛇腹路を通い、雨の日のぬかるみ、秋には落葉した紅葉、冬の霜柱を踏み締めて歩きました。

高野山内でも、土の路を歩くことが少ない中、朝の蛇腹路は心やすらぐひと時を与えてくれました。

久しぶりに、朝、訪れた蛇腹路で、学生の頃を思い出しながら撮影しました。

撮影場所 伽藍 蛇腹路



入賞 近藤妙子

コメントなし

撮影場所 一の橋口付近



ワークショップに参加して下さった、高野山高校の生徒さんたち。よくお似合いです。

●第四回もみじ祭 ワークショップ●

「山岳修行の装束(山伏装束)を知ろう!」

開催報告

昨年十一月二日・三日にワークショップ「山岳修行の装束(山伏装束)を知ろう!」を開催いたしました。これは秋期企画展「山岳信仰と高野山」に合わせて、山伏装束について、実際に着ていただいて、知ってもらおうと企画した初めての試みでした。

参加いただきました方々からは、実際に近くで装束を見て、また着用してみるなど「貴重な経験ができた」とご好評いただきました。

た。そこで毎回質問があったのは、その特殊な着方より「トイレのときはどうするのか?」というものでした。後日、装束をお借りした高野山報恩院山口文章師にお尋ねしたところ、修行中はトイレに行かないのだとか。仏道修行でも一座の修行中は不浄を避け、トイレに行った時は再度浄身作法をすることなどを教えていただきました。私たちにとっても、勉強になる貴重な体験となりました。(K)

霊宝館の庭園

ソヨゴ・冬青・ふくらしば・染用木

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

高野山は冬枯れの季節、どのような常緑植物が自生し、植栽されているかの観察に好都合な時季です。

ソヨゴは山麓部から山頂部にかけて自生し、雑木林と呼ばれる二次林を構成する樹種となっています。山頂部では、この仲間のクロソヨゴも観ることができます。

これらはモチノキ科の常緑中高木、冬も緑（青）の葉をつけているので冬青・黒冬青の字が当てられています。

ソヨゴという和名は、この木の葉

がそよそよと音をたてて風にそよぐというのが命名の理由だそうです。

高野山や近郷の方言名には、ふくらんじょう、ふくらんしえ、ふくらんしゆ、ふくらんそう、ふくらしば、などがあり、これらは、この木の枝葉を焼き火に焼べると葉の中の水分が気化して葉が膨れることによるといいます。

この葉を摘み採り、木槌などで打ちたたいたものを容器に入れて水を張り日中は陽光に晒すこと四〜五日で水が赤黒色になります。この液を



ソヨゴの葉枝と果実

煮てさまし灰汁を媒染剤として糸や布を赤色系に染める染料にしたことから、染用木、染木による、そのよきの、そめぎ、などの方言名も地方によっては遺っています。

生の著書の中に「信州では、そへごと呼び正月の門松として、松とソヨゴを組み合わせてたてられる家もある。正月の飾りとする風習は遠州でも広く見られる。神前に供えることもある」と紹介されています。冬から春に雌株には球形の果実が赤熟して四〜五センチの細い糸状の果柄で、ぶらさがっています。

故小川由一先生は紀伊植物誌IIの中で「高野山では一般の民家はもとより、寺院でも神棚の供花はサカキであるが民家ではクロソヨゴをこさかきといつて神棚に供えることも少なくない。」と書き遺されています。

昨年の暮、新聞に兵庫県宝塚市北部に四種類の「はちみつ」をつくっている養蜂家があり、その一つは「ソヨゴ主体のはちみつ」であるという記事が掲載されていました。早速、問い合わせたところ、「この辺りの里山ではアカマツがマツクイムシ害で枯れていく一方、ふくらしと呼ばれているソヨゴが増え、五〜六月に白い小花が咲きます。その花にミツバチを放して「はちみつ」をつくっています。蜜は甘さが濃く美味しいですよ。」とのことでした。

宮内庁からいただいた皇室の装束に関する資料からはイチイ科のイチイの幹材とともに、このソヨゴ（ふくら材）で御笏（笏）がつくられることを知りました。

手元の書き物には、高野山の南麓の花園村ではソヨゴの幹材を絹の糸まきコマに利用したという。とあります。

このように、ソヨゴは幅広く人の生活とかわつてきた、冬から春にかけて、特に人目をひく常磐木の一つです。



ソヨゴの幹と葉枝



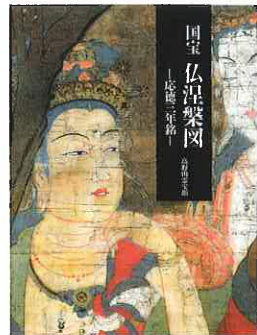
第18回大宝蔵展
『国宝 阿弥陀聖衆来迎図』
1997年 178頁
1冊まるごと阿弥陀聖衆来迎図。赤外線写真や部分図多数。



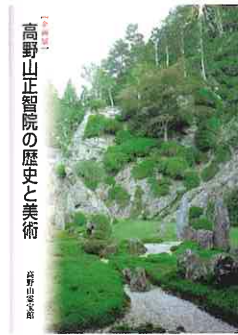
第16回大宝蔵展
『高野山の菩薩像』
1995年 158頁
様々な菩薩像を紹介。それぞれの菩薩についての解説も。



第12回大宝蔵展
『曼荼羅と星』
2003年(再版) 120頁
曼荼羅などに描かれる、神格化された星々を紹介。



第20回大宝蔵展
『国宝 仏涅槃図』
1999年 197頁
日本最古の涅槃図について美しい写真図版と共に詳細に解説。



企画展
『高野山正智院の歴史と美術』
1998年 113頁
塔頭寺院の1つ、正智院に伝わる名宝の数々。残部僅少。



第19回大宝蔵展
『顕教の仏たち』
1998年 76頁
「密」教に対する「顕」教について。霊宝館沿革も掲載。



四国展
『国宝 弘法大師空海展』
1999年 222頁
外部展図録。四国の寺院に伝わる宝物も紹介。



霊宝館『研究紀要』
1995年 109頁
霊宝館職員による研究論文4編、新出資料紹介1編収録。



第21回大宝蔵展
『密教の花』
2000年 116頁
「花」にスポットを当てて紹介する華道高野山とのコラボ企画。



平成の大修理記念展
『不動堂と八大童子像』
2003年(再版) 69頁
国宝・不動堂と八大童子像を知る上で必携の一冊。

好評発売中です。
購入は霊宝館ホームページまたは0736(56)2029まで

霊宝館図録バックナンバー

その1

県内初!

山内寺院五カ寺の庭園が 国の登録記念物に

今回新たに国の登録記念物(名勝地)となったのは、光臺院庭園・西禅院庭園・正智院庭園・本覚院庭園・桜池院庭園の五件で、和歌山県内での登録は初めてです。いづれも作庭家の重森三玲(一八九六〜一九七五)により、昭和二十六〜二十八年(一九五二〜五三)にかけて造られました。各寺院の地形と自然環境を生かした、獨創性に富む庭園となっています。



写真は光臺院庭園
※今回登録された庭園は、いずれも通常、一般公開はしておりませんが、各寺院の宿坊をご利用の方は観覧できます。